
公認会計士の社会的役割

拓殖大学
平成29年5月24日

公認会計士・監査審査会
常勤委員
松井 隆幸

構成

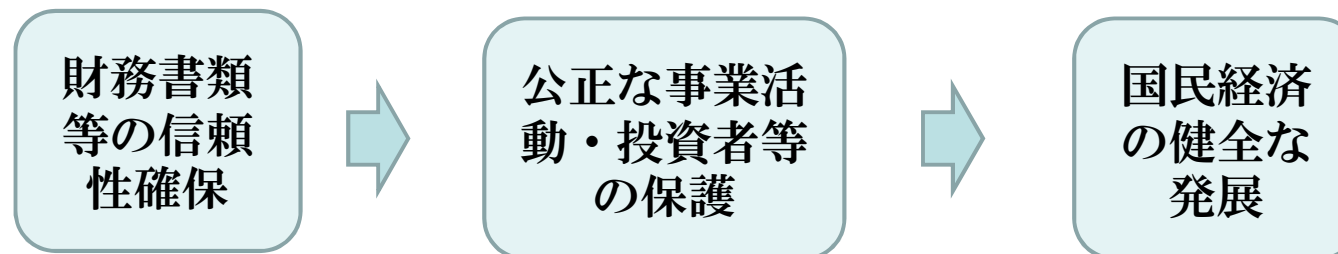
- I. 公認会計士とは
 - II. 資本市場を支える監査業務
 - III. 拡大する公認会計士の活躍領域
 - IV. 公認会計士になるには
- おわりに

I 公認会計士とは

1. 公認会計士の使命
2. 公認会計士の業務
3. 公認会計士の適格性
4. 公認会計士の独立性

I -1 公認会計士の使命

- 公認会計士の使命（公認会計士法第1条）
「公認会計士は、監査及び会計の専門家として、独立した立場において、財務書類その他の財務に関する情報の信頼性を確保することにより、会社等の公正な事業活動、投資者及び債権者の保護等を図り、もって国民経済の健全な発展に寄与することを使命とする。」



I -2 公認会計士の業務

- 使命を達成するため、公認会計士は「他人の求めに応じ報酬を得て、財務書類の監査または証明をする」（公認会計士法第2条1項）ことを業務としています。
 - － この業務を通して投資者等を保護し、国民経済の発展に寄与することが使命です。
- 加えて、公認会計士の名称を用いて「他人の求めに応じ報酬を得て、財務書類の調整をし、財務に関する調査若しくは立案をし、又は財務に関する相談に応ずる」（公認会計士法第2条2項）業務をすることもできます。

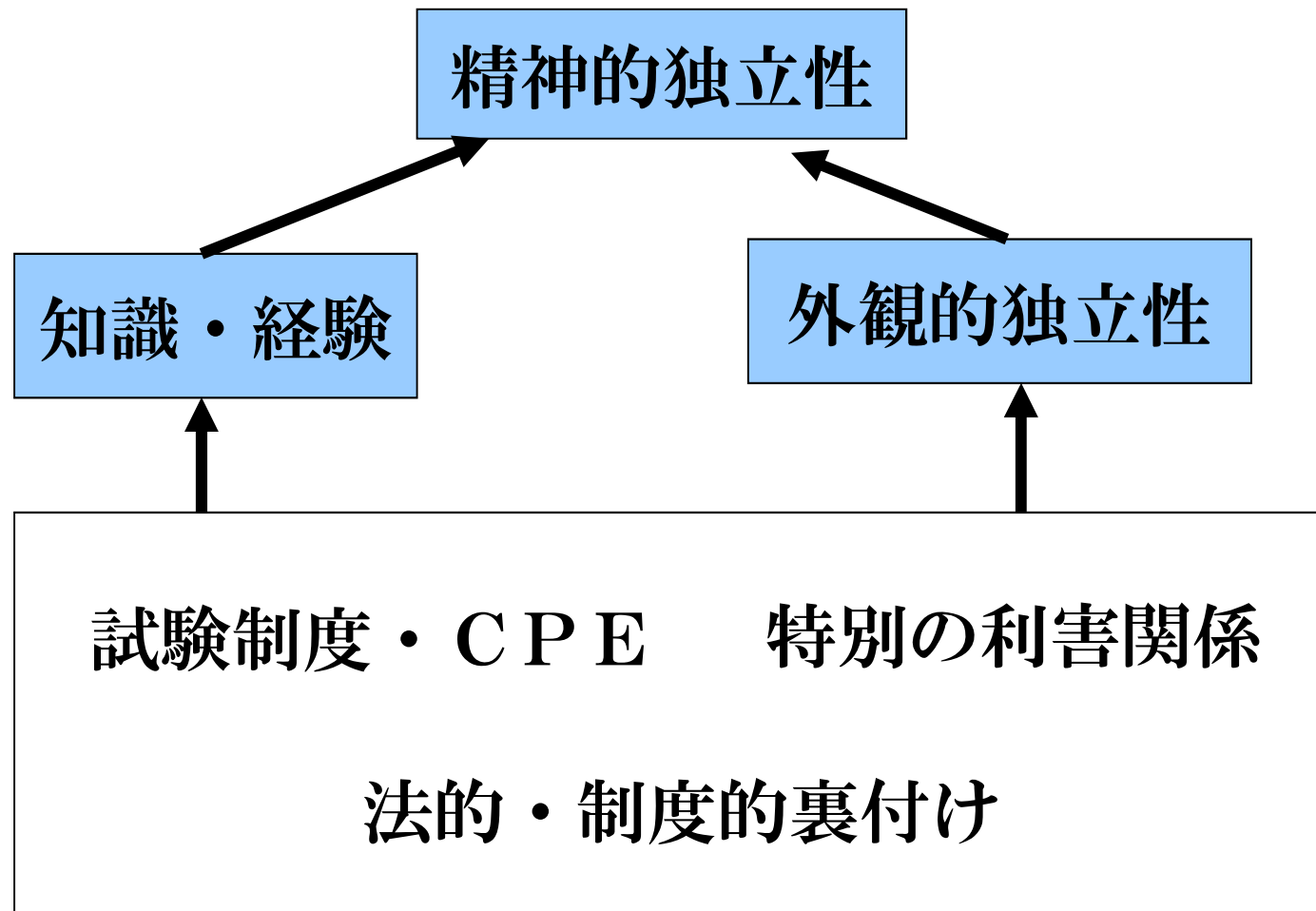
I -2 公認会計士の業務

- 金融商品取引法では、有価証券届出書（目論見書）や有価証券報告書、四半期報告書において、財務諸表（計算書類）の開示を求めています。
 - － 有価証券報告書等の開示書類は、EDINET（Electronic Disclosure for Investor's Network）で入手できます。
- そこで開示される財務諸表について、公認会計士又は監査法人の監査証明を受けるように求めています。（第193条の2第1項）
 - － 四半期財務諸表に対する監査証明は、四半期レビューとよばれています。
 - － 加えて、財務情報の作成プロセスの管理状況について報告する内部統制報告書に対しても、公認会計士または監査法人の監査証明を受けるように求めています。（第193条の2第2項）

I -2 公認会計士の業務

- 会社法も、会社法上の大会社や監査等委員会設置会社・指名委員会等設置会社は、計算書類について、会計監査人の監査を受けるように求めています。
 - － 会計監査人は、公認会計士又は監査法人であることが求められています。（第337条）
- 投資者（株主）に有用な財務情報が提供されることにより、資本市場は活発化して有望な株式会社の資金調達は可能になり、経済は発展するので
- 金融商品取引法や会社法に基づく財務諸表（計算書類）の監査は、公認会計士の独占業務になっています。

I -3 公認会計士の適格性



I -3 公認会計士の適格性

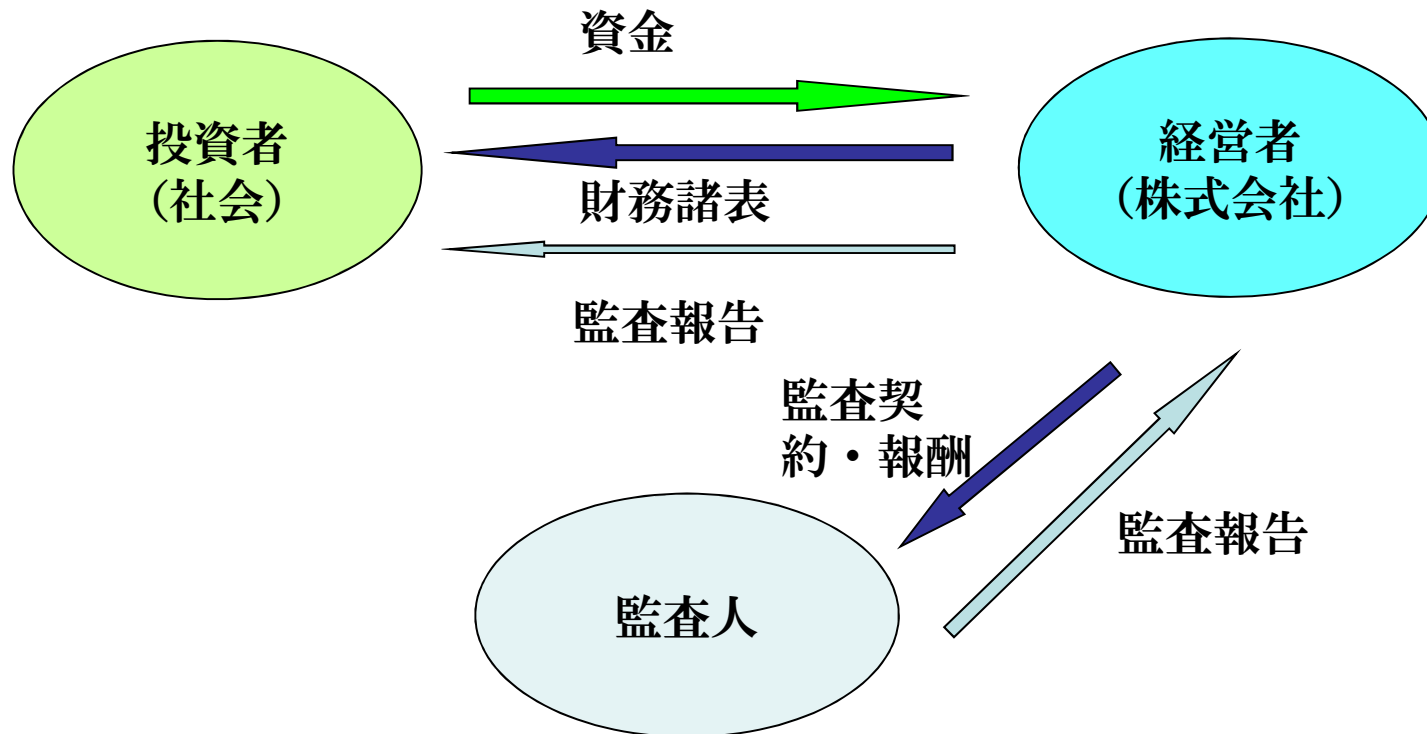
- スライド 6・7 のような監査業務を実施するには、財務諸表の信頼性について、公正不偏の立場から、適切な判断を下すことができません。**(精神的独立性)**
- そのため、監査の実施者は、会計や監査および関連する諸領域に関する相当の専門的**知識**と実務**経験**を備えている必要があります。
- そこで、金融商品取引法や会社法では、公認会計士試験に合格し、実務経験・実務補習を経て修了考査に合格した公認会計士のみに監査業務を認めているのです。
 - － 試験制度については、IV-1で説明します。

I -3 公認会計士の適格性

- 加えて、会計や監査を取り巻く環境は、資本市場の変化、株式会社等の大規模化や複雑化、技術の進歩等により大きく変化しています。
- 公認会計士は、これらの変化に対応して、専門的知識をアップデートして能力を維持・研鑽し、実務経験を積む必要があります。
- そのため、公認会計士は、継続的に専門研修を受講するように義務付けられています。
(継続的専門研修制度：Continuing Professional Education)。

I - 4 公認会計士の独立性

財務諸表の監査の構図



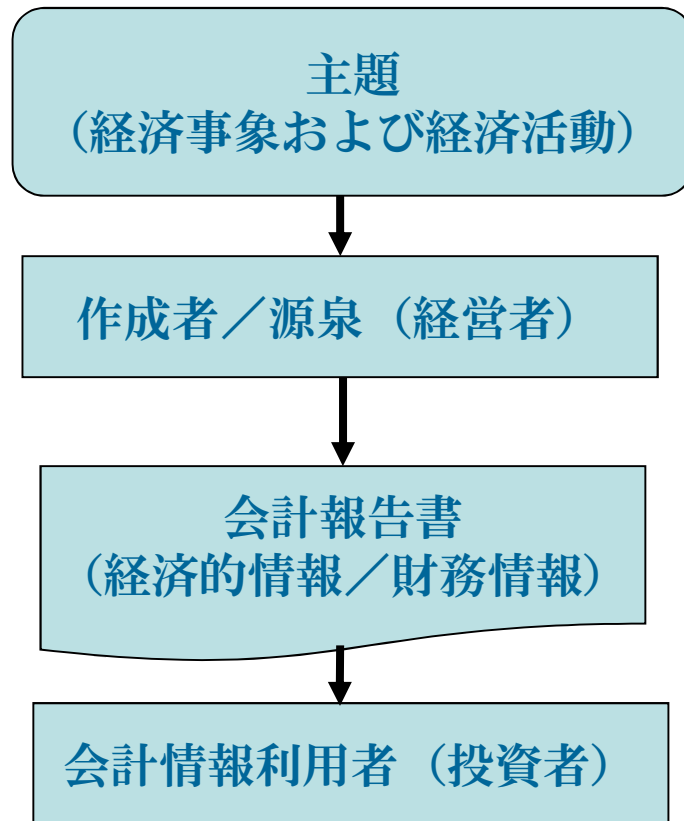
I - 4 公認会計士の独立性

- 財務諸表の監査は、経営者が公表する財務諸表の信頼性を確かめるために行われるのですが、監査報酬は経営者側から支払われる関係にあります。
- 公認会計士は、スライド11の構図の中で監査を実施しますから、**公共の利益**の観点から、常に公正不偏な判断を下すことができるように、精神的に独立であることに影響及ぼすような利害関係を持たず、また持っているかのような疑いを招かないことが重要です。（**外観的独立性**）

Ⅱ 資本市場を支える監査業務

1. 情報の信頼性確保
2. 監査法人制度
3. 監査品質を確保する制度

Ⅱ-1 情報の信頼性確保



投資者（株主等）は、
次の2つの判断をする
必要があります。

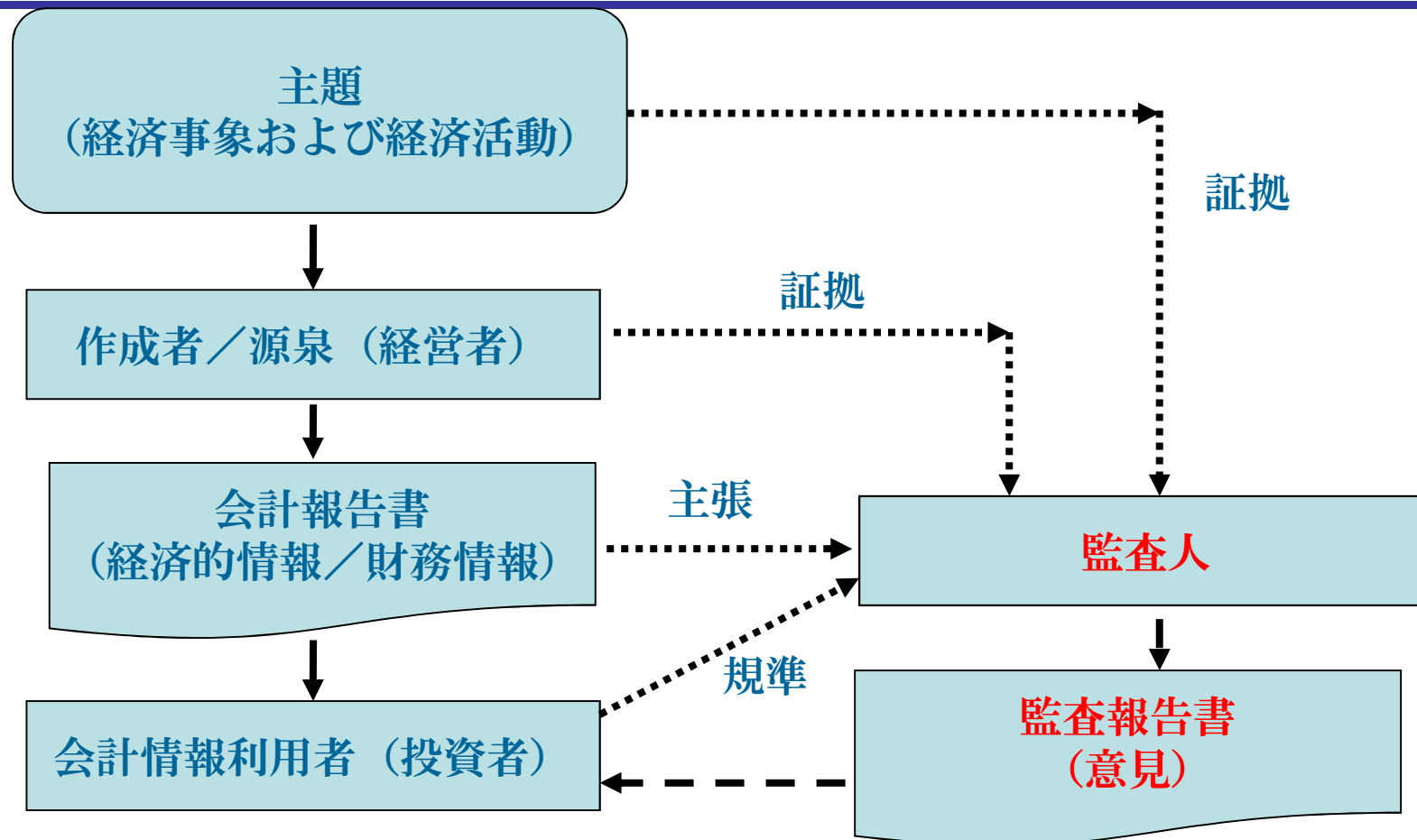
- ① 情報内容の解釈
- ② 情報の質（信頼性）の評価

鳥羽至英（訳）『基礎的監査概念』国元書房、昭和57年、18頁。用語を一部追加。

Ⅱ-1 情報の信頼性確保

- 財務諸表等の財務情報は、経済活動を行う株式会社の経営者が作成します。
- 情報の利用者である投資者は、当該株式会社について、経営者のような詳細な情報は持っていません。また、会計などについての知識も、十分に持っていないことが多いといえます。
- こうした中で、経営者には、不都合な情報は隠したい、あるいは状況を実際よりも良く見せたいという誘惑が生じることもあります。
- 投資者は、情報の質（信頼性）を判断することができるでしょうか？

Ⅱ-1 情報の信頼性確保



鳥羽至英（訳）『基礎的監査概念』国元書房、昭和57年、22頁。用語を一部追加。

Ⅱ-1 情報の信頼性確保

- 情報が信頼できなければ、株式を購入する、すなわち投資をしようという人は、少なくなるでしょう。
- 一方、投資者自身で情報の信頼性を確かめることは困難です。
- 投資を促進して会社の資金調達を容易にしなければ、経済は発展しません。そのため、情報の信頼性を確保することは必要不可欠です。
- この問題を解決するには、経営者と投資者の間に立つ人（監査人）が情報の信頼性を確かめ、投資者に結果を投資者に伝えるようにすればよいのです。

Ⅱ-1 情報の信頼性確保

- 投資者等が公表された財務情報に信頼を置いて意思決定できるのは、公認会計士が財務諸表の監査を通して情報の信頼性を確かめているからです。
- 公認会計士は、資本市場の活性化、ひいては国民経済の発展に不可欠な役割を担っています。
- 公認会計士は、経済社会における基盤として、**公共の利益に貢献**しているのです。

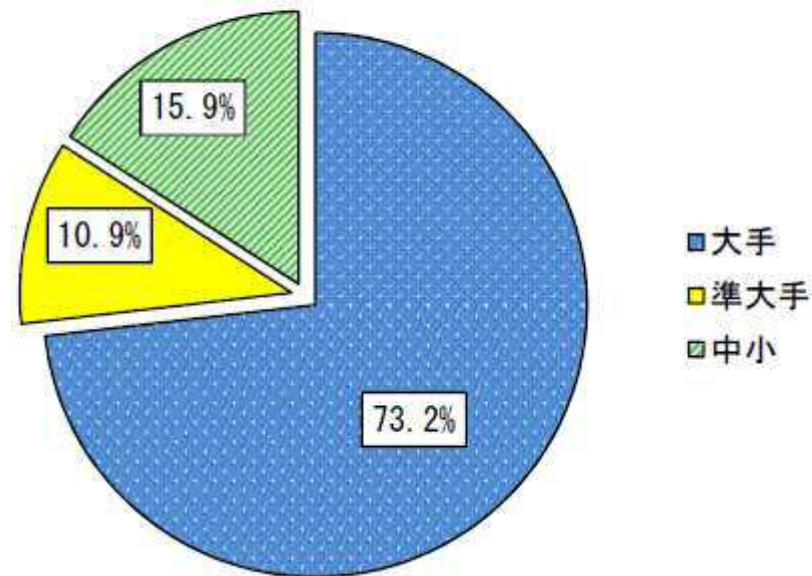
Ⅱ-2 監査法人制度

- 監査対象である会社等が大規模化・多角化すると監査人側も組織化する必要があります。そのため、今日、ほとんどの上場会社の監査は、大手監査法人や準大手監査法人によって実施されています。
 - － 監査法人とは、財務書類に関する監査業務を組織的に行うことを目的として、公認会計士が共同して、公認会計士法に基づいて設立した法人です。
 - － 平成28年3月末時点で、214の監査法人があります。

Ⅱ-2 監査法人制度

図表Ⅲ-1-2 <監査法人別上場被監査会社数（単位：社）>

大手監査法人	2,656
準大手監査法人	397
中小監査事務所	577
合 計	3,630

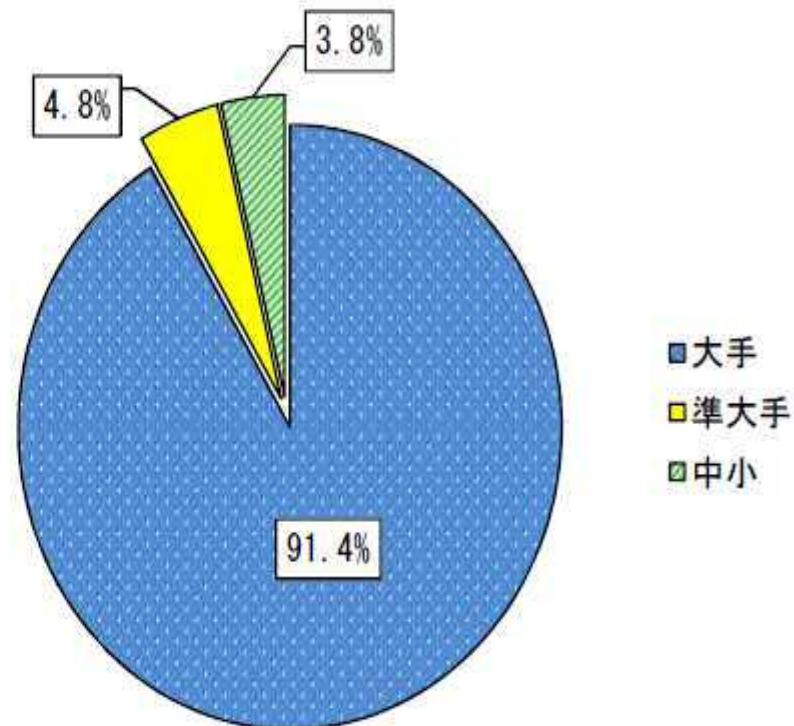


公認会計士・監査審査会『監査事務所の概況』平成28年7月、22頁。

Ⅱ-2 監査法人制度

図表Ⅲ-1-3 <監査法人別上場被監査会社の時価総額（単位：百万円）>

大手監査法人	484,655,522
準大手監査法人	25,563,182
中小監査事務所	19,948,289
合 計	530,166,993



公認会計士・監査審査会『監査事務所の概況』平成28年7月、22頁。

Ⅱ－２ 監査法人制度

大規模な監査法人 (大手監査法人)	大規模な監査法人に準ず る規模の監査法人 (準大手監査法人)	中小規模監査事務所
上場会社を概ね 100 社以 上監査し、かつ常勤の監査 実施者が 1,000 名以上の 監査法人	大手監査法人以外で、比較 的多数の上場会社を被監 査会社としている監査法 人	中小監査法人(大手監査法 人及び準大手監査法人以 外の監査法人)並びに共同 事務所及び個人事務所

公認会計士・監査審査会『監査事務所の概況』平成28年7月、2頁。

Ⅱ－２ 監査法人制度

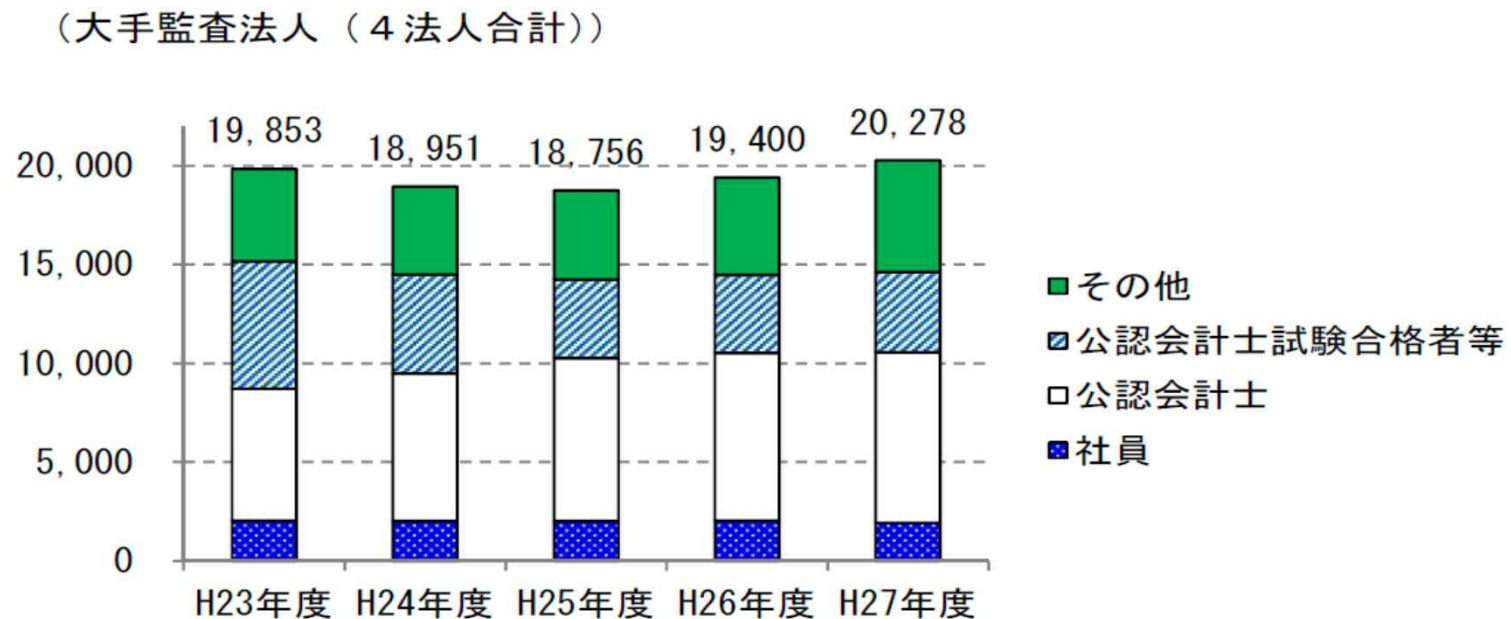
(大手監査法人)	(準大手監査法人)
有限責任あずさ監査法人	仰星監査法人
新日本有限責任監査法人	京都監査法人
有限責任監査法人トーマツ	三優監査法人
PwC あらた有限責任監査法人	太陽有限責任監査法人
	東陽監査法人
	優成監査法人

50音順で記載

公認会計士・監査審査会『監査事務所の概況』平成28年7月、3頁。

Ⅱ－２ 監査法人制度

- 社員・常勤職員の人数の推移（単位：人）

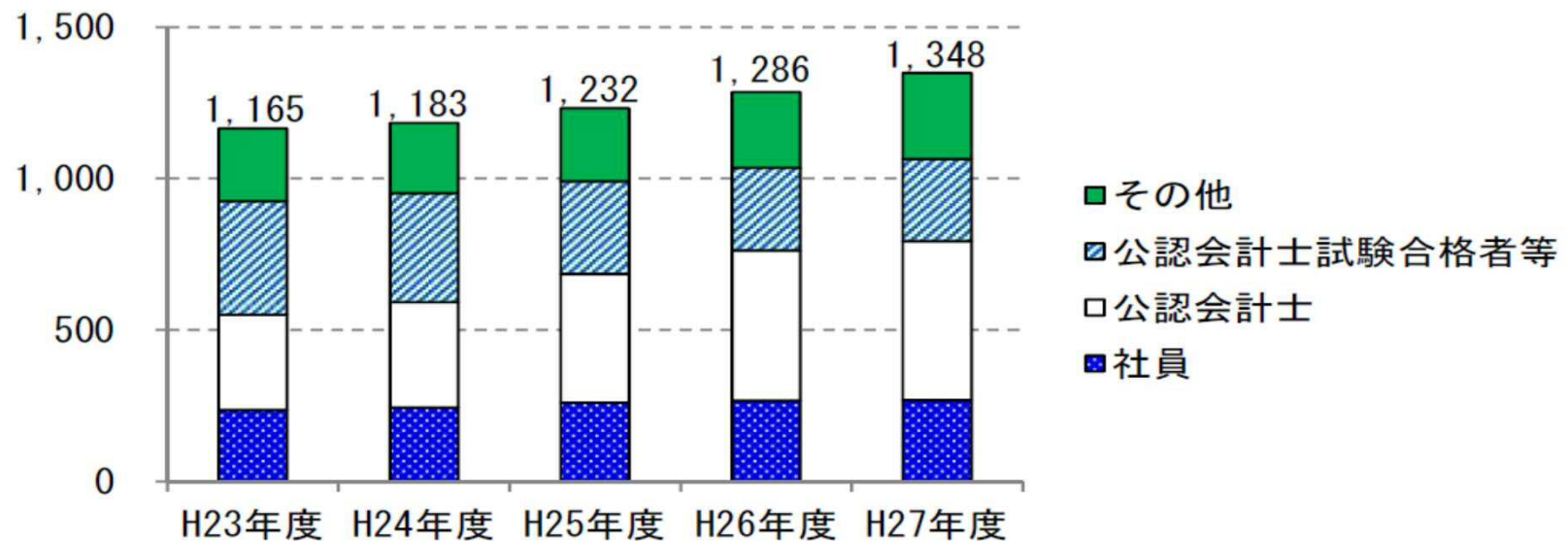


公認会計士・監査審査会『監査事務所の概況』平成28年7月、11頁。

Ⅱ－２ 監査法人制度

- 社員・常勤職員の人数の推移（単位：人）

（準大手監査法人（６法人合計））

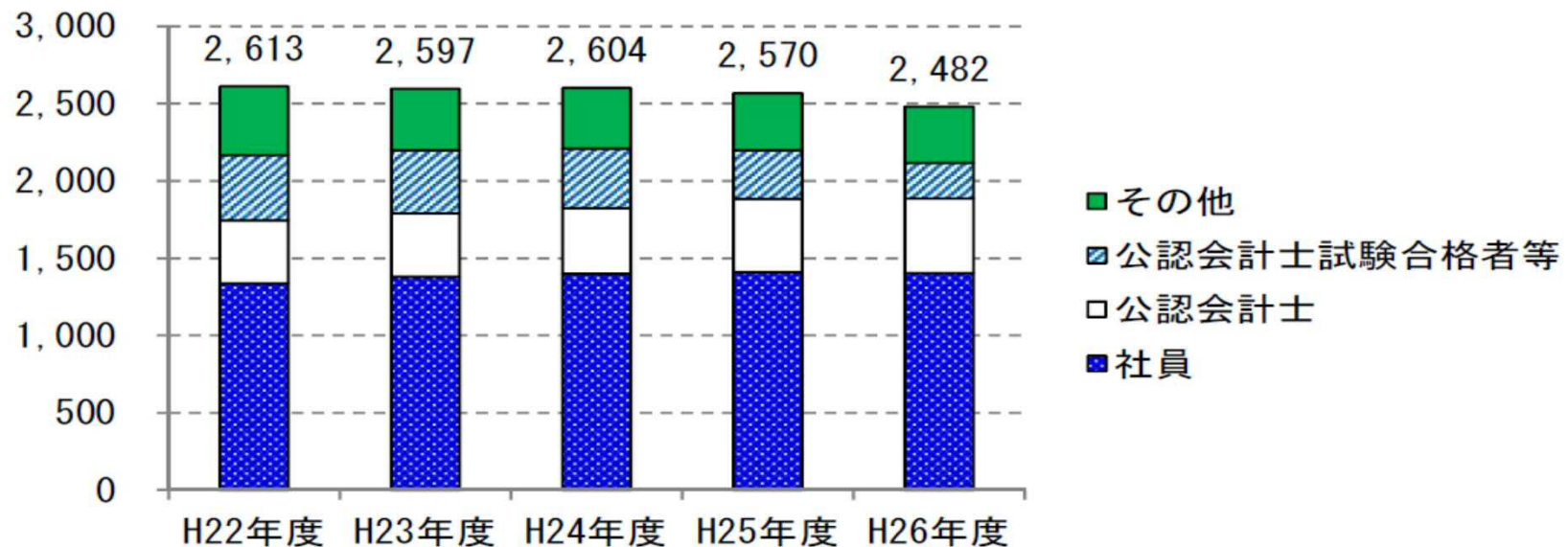


公認会計士・監査審査会『監査事務所の概況』平成28年7月、11頁。

Ⅱ－2 監査法人制度

- 社員・常勤職員の人数の推移（単位：人）

（中小監査法人（合計））



公認会計士・監査審査会『監査事務所の概況』平成28年7月、12頁。

Ⅱ-2 監査法人制度

- グローバルに事業を展開する会社を監査するには、監査人もグローバルなネットワークを持つ必要があります。
- 大手監査法人や準大手監査法人は、国際的なネットワークに所属し、ネットワークを構成するネットワーク・ファームとなっています。
- 規模が大きくなると、監査法人も、組織的な運営をすることが必要になります。各監査法人が実効的な組織運営を実現するための指標として、平成29年3月、金融庁が設置した検討会は、「監査法人のガバナンス・コード」を公表しました。

Ⅱ－２ 監査法人制度

監査法人	国際的なネットワーク
有限責任あずさ監査法人	KPMG International Cooperative
新日本有限責任監査法人	Ernst & Young Global Limited
有限責任監査法人トーマツ	Deloitte Touche Tohmatsu Limited
PwC あらた有限責任監査法人	PricewaterhouseCoopers International Limited
仰星監査法人	NEXIA International Limited
京都監査法人	PricewaterhouseCoopers International Limited
三優監査法人	BDO International Limited
太陽有限責任監査法人	Grant Thornton International Limited
東陽監査法人	BDO International Limited
優成監査法人	Crowe Horwath International

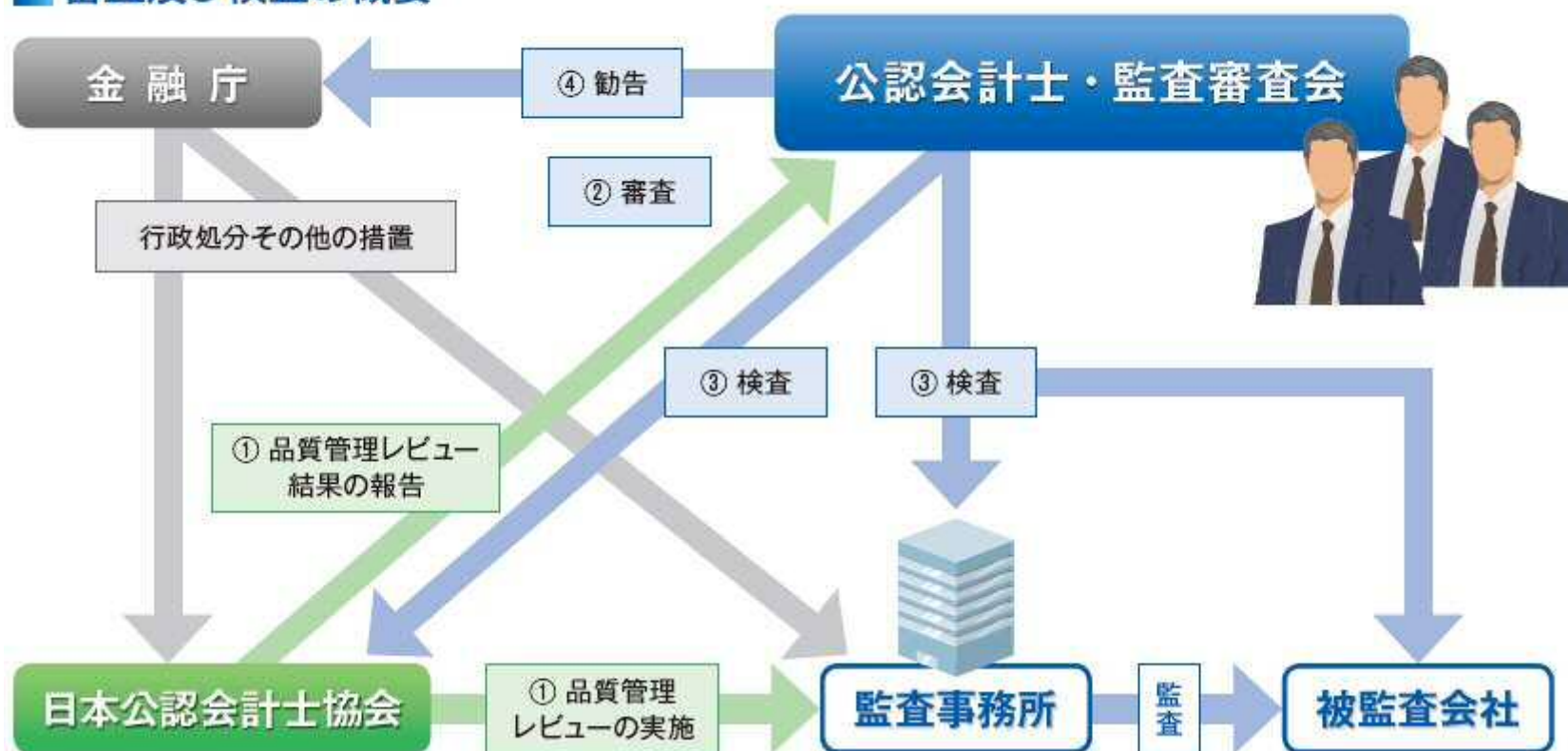
公認会計士・監査審査会『監査事務所の概況』平成28年7月、18-19頁。

Ⅱ-3 監査品質を確保する制度

- 投資者等が財務諸表の監査に信頼をおくことができるためには、監査の品質が一定水準以上に保たれなければなりません。
- 監査の品質を確保するため、公認会計士や監査法人は、一般に公正妥当と認められる監査の基準を遵守して監査を実施するように要請されています。
 - － わが国では、企業会計審議会が「監査基準」を公表し、日本公認会計士協会が実務指針を公表しています。
- 監査法人は、監査の基準を遵守して組織的に監査を行うため、品質管理態勢を整備・運用しなければなりません。
- 加えて、重層的に品質管理をチェックする制度が構築されています。

Ⅲ-3 監査品質を確保する制度

■ 審査及び検査の概要



公認会計士・監査審査会 パンフレット 5頁。

Ⅲ 拡大する公認会計士の活躍領域

1. 求められる会計人材
2. 監査法人の中で
3. 株式会社等の組織の中で
4. 独立した職業人として

Ⅲ-1 求められる会計人材

- 株式会社はもちろん、いかなる組織体においても、信頼しうる財務情報が適時に提供されなければ、経営者も投資者その他の関係者も適切な意思決定を行うことはできません。
- 財務情報の作成や監査を担う会計人材は、経済社会のさまざまな分野で必要とされています。
- 経営者も、会計に精通することにより、財務情報を通して組織の状況を把握できるので、会計の知識は必要です。
- 会計・監査の専門的能力や実務経験を有する公認会計士は、最も必要とされる会計人材です。それだけに、公認会計士は、社会の中で、いろいろな役割を果たすことが期待されています。

Ⅲ-2 監査法人の中で

- 監査業務

- － 法定監査＝金融商品取引法に基づく監査や会社法に基づく会計監査人監査のほか、学校法人監査や労働組合監査など、その範囲は広がっています。一定規模以上の医療法人や社会福祉法人にも導入される予定です。
- － 任意監査＝システム監査や情報セキュリティ監査なども行っています。

- 税務業務

- アドバイザリー業務

- 大規模な監査法人では、監査法人を中核としたグループを形成し、グループの中に、税務業務を行う法人やアドバイザリー業務を行う法人を設立しています。

Ⅲ-3 株式会社等の組織の中で

- 会計・財務・経営企画等の担当者
- CFO（最高財務責任者）
- 監査役等、またはそのスタッフ
- 内部監査担当者
- 内部統制構築・推進担当者
- （金融機関等での）融資業務担当者

Ⅲ-3 株式会社等の組織の中で

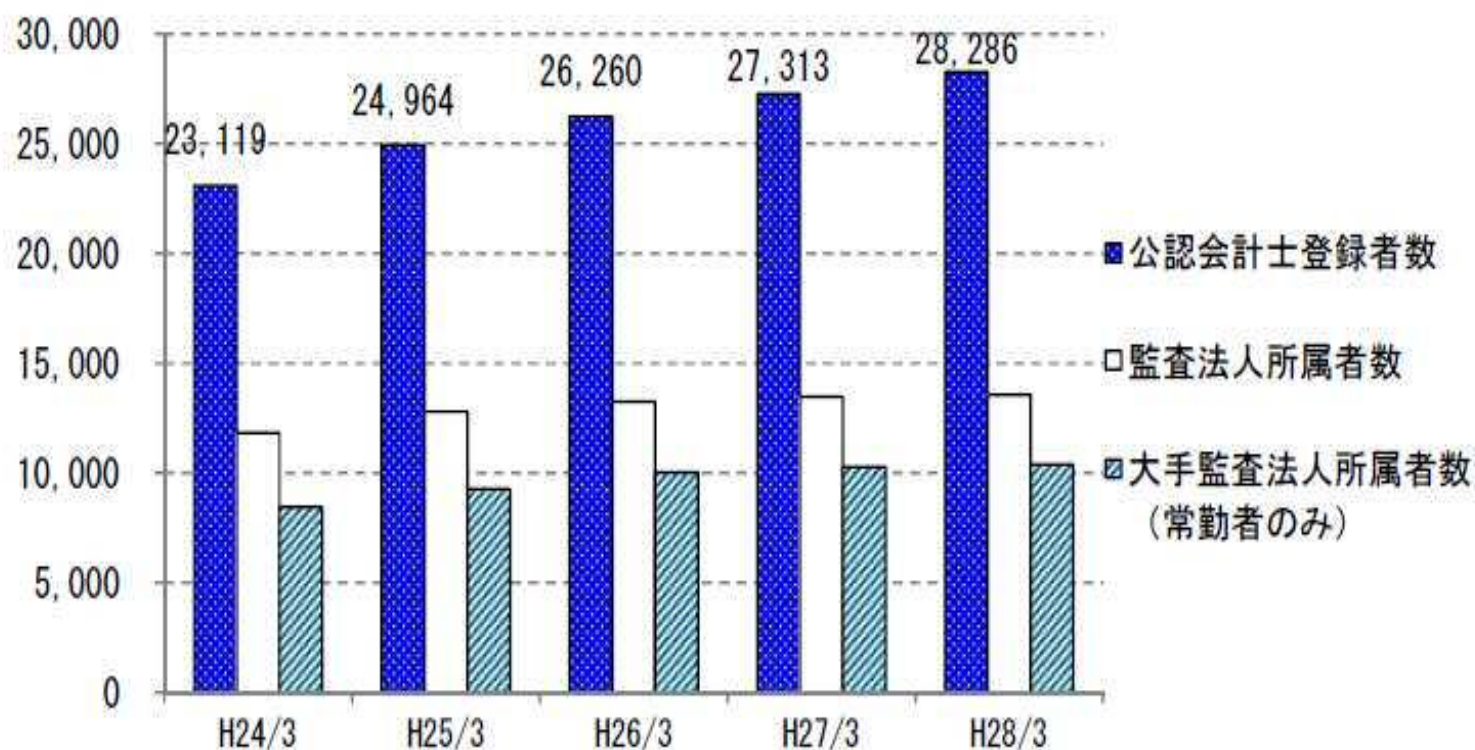
- 会計基準に精通した公認会計士は、会計や財務の担当者として、即戦力になります。
- 豊富な監査経験を持つ公認会計士は、監査役スタッフや内部監査担当者として適任です。
- 監査法人の監査を受ける際、監査法人と円滑なコミュニケーションをとることができます。
- 組織の中で、会計や監査の知識を必要とする業務は数多くあります。営利組織だけでなく、非営利組織においても同様です。
- 官公庁でも、会計や監査（検査）の担当者として、会計や監査の専門家を必要としています。

Ⅲ-4 独立した専門職業人として

- 独立開業
 - － 公認会計士としてキャリアを積んだ後、自ら事務所を開業し、税務業務、監査業務、会計アドバイザー業務等を提供している人も数多くいます。
- 社外役員
 - － 上場会社の社外取締役や社外監査役に就任する公認会計士も多くなっています。
- 大学等の教員
 - － 大学・大学院の専任教員に就任する公認会計士も多くなっています。
 - － 他の業務の傍ら、大学・大学院の非常勤教員に就任する公認会計士もおられます。

Ⅲ-4 独立した専門職業人として

図表 I-1 <公認会計士登録者の数の推移（単位：人）>



公認会計士・監査審査会『監査事務所の概況』平成28年7月、8頁。

IV 公認会計士になるには

1. 公認会計士試験制度
2. 受験者の動向
3. 平成28年の試験結果と合格者の動向

IV-1 公認会計士試験制度

- (参考資料) 「目指せ、公認会計士！」参照。
- 公認会計士法第5条は、公認会計士試験の目的と方法について、次のように規定しています。
 - － 「公認会計士試験は、公認会計士になろうとする者に必要な学識及びその応用能力を有するかどうかを判定することを目的とし、短答式及び論文式による筆記の方法により行う。」
- 公認会計士・監査審査会は、公認会計士試験の実施を担う機関です。

IV-1 公認会計士試験制度

- 短答式試験と論文式試験は独立の試験ではなく、役割を分担しつつ、受験者の学識と応用能力を判定します。
- 短答式試験は、受験者が論文式試験を受験するために必要な専門的知識を備えているかを判定するための試験です。
- したがって、審査会が公表している「出題範囲の要旨」に沿って、偏りなく基礎力を確かめる問題や基本的な事項の理解を問う問題が出題されます。
 - － 会計専門職大学院を修了した者は、短答式試験のうち、「財務会計論」「管理会計論」「監査論」が免除されます。

IV-1 公認会計士試験制度

- 短答式試験の試験時間・配点等

試験科目	試験時間	問題数	配点
財務会計論	120分	40問以内	200点
管理会計論	60分	20問以内	100点
監査論	60分	20問以内	100点
企業法	60分	20問以内	100点

IV-1 公認会計士試験制度

- 論文式試験は、受験者が必要な専門的知識を有しているという前提で、受験者の思考力、判断力、応用能力、論述力等を評価することに重点をおきます。
- そのため、短答式試験のある科目の「出題範囲の要旨」では、論文式試験の出題範囲を短答式試験よりも絞り込んでいます。
- 会計学、監査論、企業法、租税法及び民法については、法令集を受験時に配布し、試験を実施しています。

IV-1 公認会計士試験制度

- 論文式試験の試験時間・配点等

試験科目	試験時間	問題数	配点
会計学	300分	大問5問	300点
監査論	120分	大問2問	100点
企業法	120分	大問2問	100点
租税法	120分	大問2問	100点
選択科目	120分	大問2問	100点

IV-1 公認会計士試験制度

● 合格基準

短答式試験

25年		26年		27年		28年		29年
第Ⅰ回	第Ⅱ回	第Ⅰ回	第Ⅱ回	第Ⅰ回	第Ⅱ回	第Ⅰ回	第Ⅱ回	第Ⅰ回
67%	67%	70%	68%	60%	67%	67%	66%	71%

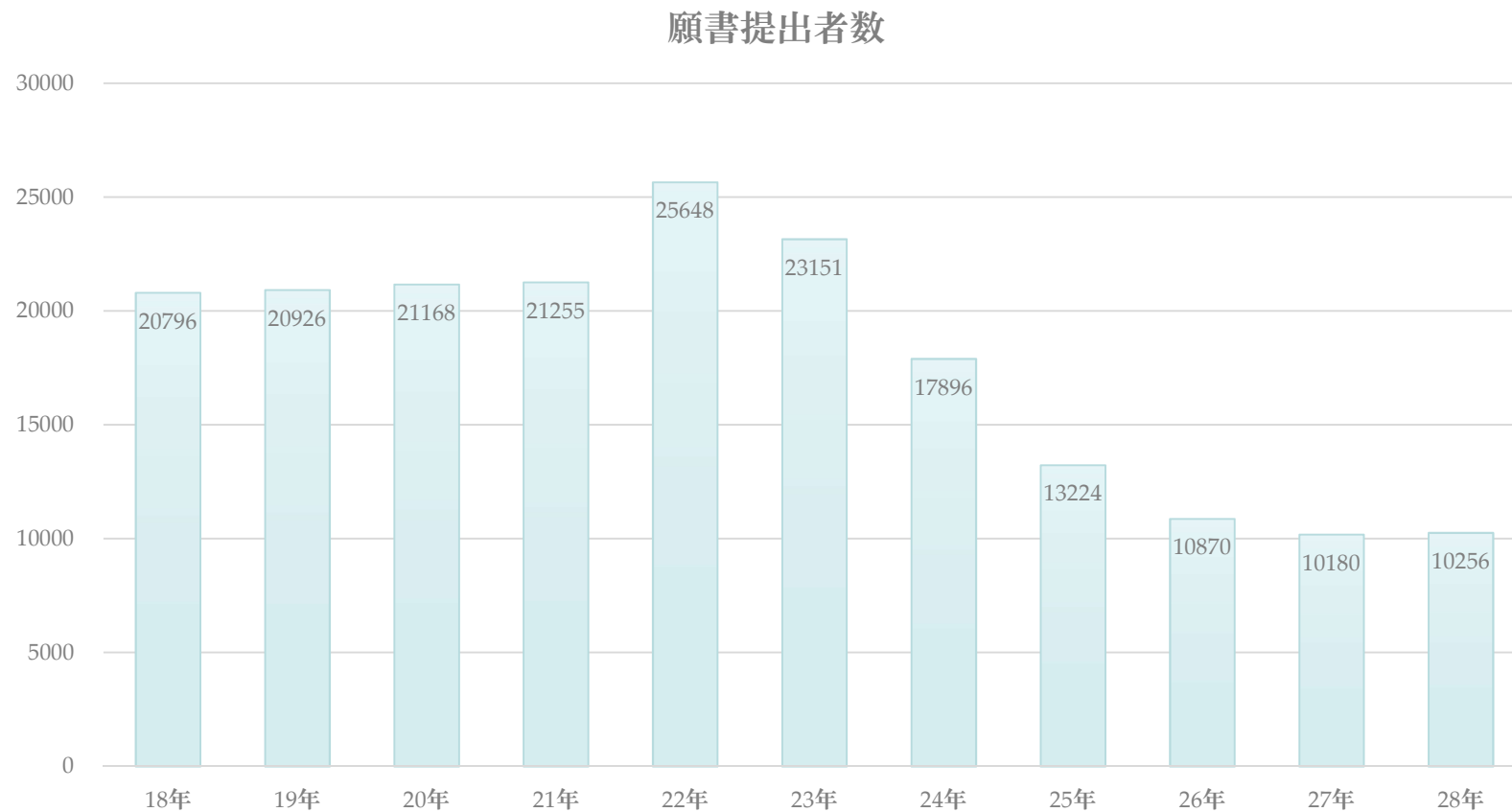
(注) 27年の第1回を除き、1科目につき満点の40%未満のもののある者は不合格

論文式試験

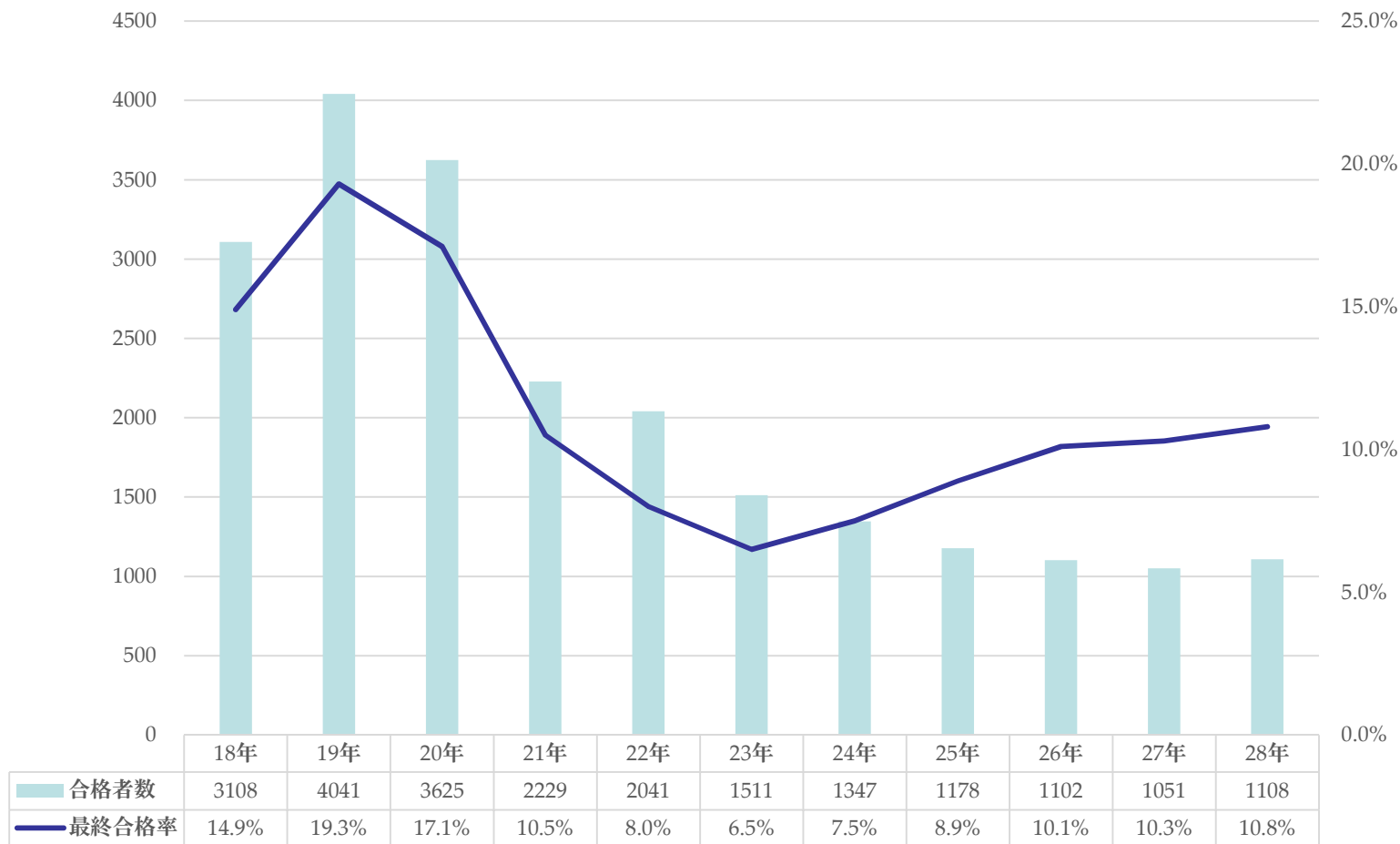
25年	26年	27年	28年
52.0%	52.0%	52.0%	52.0%

(注) 1科目につき満点の40%未満のもののある者は不合格

IV-2 受験者の動向



IV-2 受験者の動向



IV-2 受験者の動向

- 平成27年まで、願書提出者は5年連続、合格者は8年連続して減少してきましたが、平成28年、わずかですが増加に転じました。
- 平成29年第Ⅰ回の短答式試験は、受験者（願書提出者）7,818人、合格者1,194人でした。平成28年第Ⅰ回と比較して受験者は788人（11.2%）、合格者は331人（38.4%）増加しました。
- 平成29年の第2回短答式試験は、5月28日に実施されます。願書提出者は8,214人で、平成28年第2回と比較して246人（3.1%）増加しました。

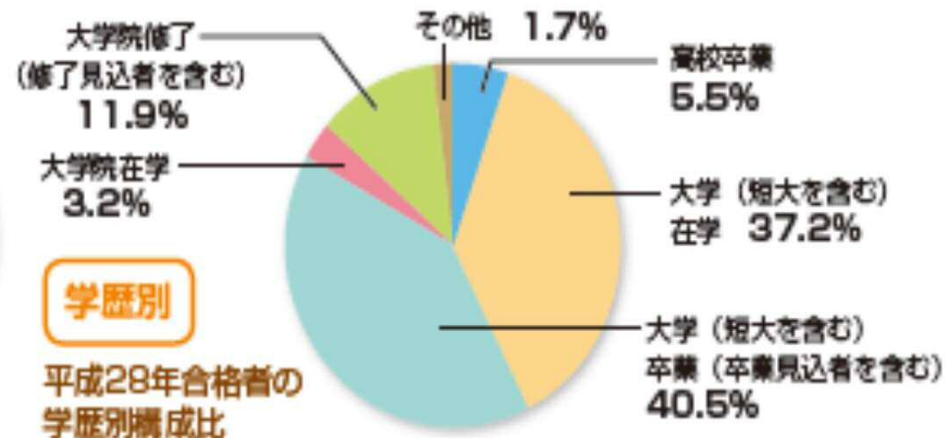
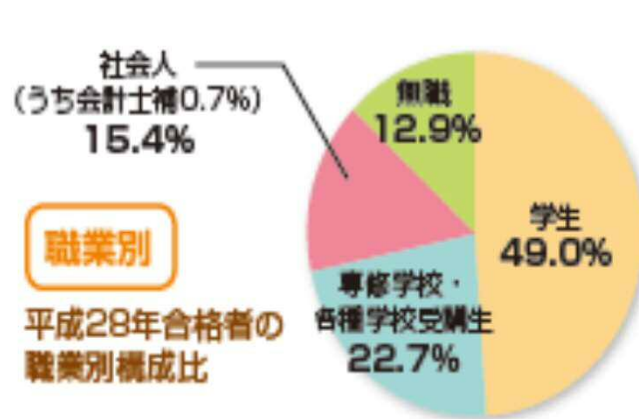
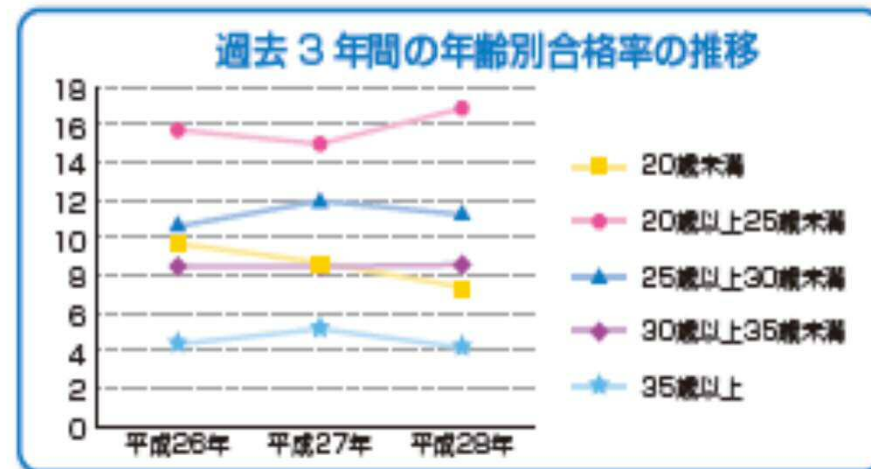
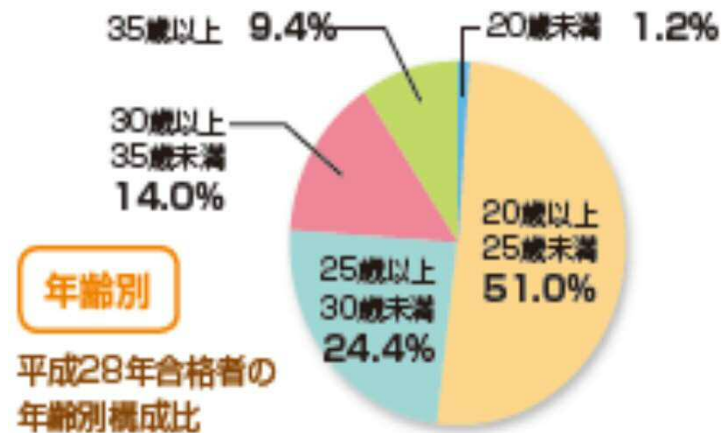
IV-3 平成28年の試験結果と合格者の動向

平成28年公認会計士試験結果の概要

区分	平成28年試験		
		短答式試験の受験者等 (免除者を含む)	短答式試験みなし合格者 (旧第二次試験合格者)
願書提出者数 (a)	10,256人	10,139人	117人
短答式試験受験者数	8,644人	8,644人	—
短答式試験合格者数	1,501人	1,501人	—
論文式試験受験者数	3,138人	3,021人	117人
最終合格者数 (b)	1,108人	1,098人	10人
合格率 (b/a)	10.8%	10.8%	8.5%

「短答式試験の受験者等（免除者を含む）」欄の「論文式試験受験者数」には、平成28年度の短答式試験合格者のほか、公認会計士法第10条の規定による免除者を含む。

IV-3 平成28年の試験結果と合格者の動向



IV-3 平成28年の試験結果と合格者の動向

- 平成28年の試験合格者の就職状況は、いわゆる売り手市場でした。
- 試験合格者は、多くの場合、監査法人に就職します。30歳代半ばまでの合格者は、ほとんどの場合、希望すれば大手監査法人に採用されたと聞いています。
- 大手監査法人でも予定人数を確保できなかったといわれており、準大手監査法人では、いかにして合格者を確保するかが重要な経営課題となっています。
- 大手監査法人や準大手監査法人では、アシスタント・スタッフ、監査トレーニー等の名称で試験合格を目指す者を雇用し、比較的定型的な監査業務に従事させながら、受験勉強を支援する制度を採用するところも多くなっています。

おわりに

- 会計人材は、経済社会のさまざまな分野で必要とされています。
- 公認会計士は、会計人材の中でも、高度の専門的知識と実務経験を有する者として認められた存在です。
- 上場会社等の監査は、公認会計士にのみ認められた大変重要な社会的役割です。
- 今日、多様な組織体が公認会計士を必要とするようになっていきます。

おわりに

- 公認会計士＝監査人では**ありません**。
IVで述べたように、さまざまな領域で活躍し、社会的に重要な役割を担うことができます。
- 公認会計士は、会計や監査の知識や経験という強みを生かして、グローバルにもローカルにも、自身のライフスタイルにも合わせて、さまざまな形で社会に貢献することができるのです。

ご清聴ありがとうございました

充実した大学生活を
送ってください